

事業企画

— 地域、市民、ホールをつなぐ

〔日 時〕 平成29年6月15日(木) 18:30～20:30

〔会 場〕 沖縄産業支援センター

〔参加人数〕 27名(受講者25名、関係者2名)



〔講師〕 **ヲザキ 浩実** (久留米シティプラザ副館長／エグゼクティブ・プロデューサー)

民間の劇団勤務などを経て、2011～2015年あうるすぽっと(豊島区立舞台芸術交流センター)チーフ・プロデューサー。年間のプログラムのディレクションを行なう一方、演劇・ダンス公演のプロデュース、大学などの教育研究機関との教育プログラムの共同開発などを手がける。2015年より現職。

▶ 概要

劇場などで行う事業は、誰のために、どういう企画を、どのように発信するのがいいのか。企画の立案から実施までの課題を考える。また、街と人をつなぐコミュニティをどのように文化と結びつけることができるのか、企画をグループで考え、発表するワークショップを行なった。

●アイデアを具現化するためのワークショップ

はじめに、劇場の事業や個人プロジェクトに関わらず、面白いと考える企画を付箋に書き留める個人ワークが行われた。その後、受講生は4～5名のチームに分かれ、伝統や食、街づくりなどの興味から発想したアイデアについて、「地元に住む人を巻き込んだらどうか？」など、互いに曖昧なところを指摘したり、整理し合うグループワークを実施。ヲザキ氏は、「企画の第一歩はアイデアを外に出すこと」と言い、グループワークを通して、自分のアイデアを伝え、具現化していくまでのプロセスを体験してほしかったという。

●企画を生み、実現するまでに必要なプロセス

こうしたアイデア出しから、いざ事業にするためには、企画の具体性がより必要となる。この課題に対して、企画を具現化していく上でまず共有化を意識すること。個人や団体であっても、企画を動かすための同意や賛同・協力を得るためには、多角的な軸(視点)で、企画の中身を整理して、相手と共有していくプロセスが必要となる。具体的に、企画を事業化するため

には、「予算・時間・場所・人間」を明確にし、「創造発信・人材育成・教育普及・地域振興」のどの目的に合うのか、整理する。本番というゴールに向けてやるべきことを逆算して行っていくのが良い。

●アートと関わる選択肢を広げた企画

一方で、自分たちの経験と常識だけで考えてしまうとアイデアが詰まり、壁にぶつかることがある。こうした固定概念に対して疑いの目をもち、逆転の発想で企画を見つめることが大切である。

豊島区立舞台芸術交流センター「あうるすぽっと」は、もともと東池袋駅周辺の大規模な再開発でできたビルの中に入っている区立劇場で、再開発で一度失われたコミュニティを立て直す必要があり、賑わいの創出も求められていた。そのため、誰でも馴染みがあり、みんなが楽しめる「盆踊り」に注目。劇場内ではなく、地域参加型の企画としてあえて野外イベント「にゅ～盆踊り」が実施された。他にも、2010から2013年まで行われた、「渋さ知らズde怖いもの知らず 池袋大作戦」では、楽器が弾けない人や美術やダ



2008年に池袋で開催した「にゅ〜盆踊り」(撮影：浦井直志)

ンスなどのスキルを持っていない人でも参加できるように工夫するなど、芸術や美術に対する知見を持つ人しか関われないという壁を感じやすいアートの敷居をいかに低くできるかに取り組んできた。

●沖縄ならではの企画のかたち

後半は、グループ内で企画を見直し、実現可能な事業企画を考え、プレゼンする機会が設けられた。

- ・新しく開設される那覇市民会館と街をつなげる企画「劇場と街と幸せな1日」：街を散策しながらアートに出会えるアイデア。例えば、地図の書かれた印のところに行くと、三線を弾く人や沖縄の歴史の語り部に出会える、ホテルと連携した宿泊型プログラム。

- ・子どもが映画づくりを通して、表現する場を提供する企画「映画制作委員会」：教育機関と連携して、夏休みの自由課題として映画の脚本や演出、音楽、劇中の衣裳作りまでプロに教わる機会を創出し、子どもたちが制作した映画をお披露目してもらう。

フザキ氏は、「劇場と街と幸せな1日」について、



企画の出発点は、「やりたいこと（成果・価値・問題意識）」と「やるべきこと（使命・課題）」

「街と人との接点を、文化で結びつける意味では実現しやすい」とコメント。久留米シティプラザでも、「賑わいの創出による中心市街地の再活性化」を目指し、舞台芸術に興味がない人もターゲットにした、施設内の屋根付き広場でのイベントを行っている。まずは施設に足を運んでもらうこうした取り組みと同様に、地域の人が劇場そのものに接点を持ってもらえる」と評価した。「映画制作委員会」は「映画制作を指導する大人のほかに、子どもたちをサポートする大人がいると良い」もう一捻り考えてほしいとコメント。なぜなら、一般の人もサポーターとして子どもと一緒に、プロから映画制作を学べる機会になり、一緒にクリエーションする姿が見えてくると、より魅力的な事業として支援されやすくなるためである。他にも、魅力的な企画発表が行われ、同時に自分たちが考えた企画と比較しながら、課題を見つめ直す時間となった。

●固定概念を外した先に、沖縄の文化資源が見える

会場からは、沖縄の地域課題に関する質問が挙がった。前提として、地域課題として挙げられる経済格差や福祉、教育などはアートを介して解決している事例がある。また、地域住民がアートプロジェクトに参加して、地域の魅力や個性を再発見し、アートを発信する楽しさを覚えてもらえることも大切。ただ、沖縄は芸術文化の交流人口が少なく、こうした人口を増やしていくためにも、「アートに精通していない人」をうまく巻き込んでいけるか、それは企画づくりにかかっている。アートに関わる人が増えることは、結果として地域に多様性を生み出し、新しい芸術文化や、グローバルな流れもきちんと汲み取れる。これからの企画作りのヒントが伝えられた。



ワークショップ（企画づくり）